

野菜の作業

種まき	定植 (植付け)	栽培のポイント															
<ul style="list-style-type: none"> ・ホウレンソウ ・コマツナ ・チンゲンサイ ・ダイコン ・カブ ・スイートコーン ・ニンジン ・シロウリ ・セルリーなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・スイカ ・ナス ・サツマイモ ・オクラ ・ゴーヤ ・アスパラ ・ニラ 等 <p style="text-align: center;">収 穫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タマネギ ・ニンニク ・シュンギク ・キュウリ ・ニラ ・サヤエンドウ ・サトウ ・ラッキョウなど 	<p>【アスパラガスの立茎と管理等】</p> <p>立茎の判断と時期</p> <p>露地普通栽培では、収穫始めは4月中旬から5月上旬であり5～6月にかけて集中的に収穫されます。この時期に貯蔵養分は大量に消費され貯蔵量の50%以下まで減少し、そのまま収穫し続けると来春の収穫量に影響してしまいます。そこで収量等の変化や株の年生を目安に収穫を打ち切り、立茎を行います。</p> <p>1) 収量による判断（目安）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピーク時に対して30%の収穫量 ・L級以上比率が30～40%になったとき <p>2) 収穫物等による判断</p> <ul style="list-style-type: none"> ・穂先が開きやすくなる ・側芽から細茎の発生が多くなる ・斜めや曲がりの発生が多くなる ・収穫物の糖度が減る <p>3) 株の年生による春どり収穫期間の目安</p> <table border="1" data-bbox="592 1043 1297 1240"> <thead> <tr> <th>株の年生</th> <th>1年生養成苗</th> <th>セル成型苗</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2年生(収穫1年目)</td> <td>15～20日間</td> <td>0～5日間</td> </tr> <tr> <td>3年生(収穫2年目)</td> <td>30～40日間</td> <td>20～30日間</td> </tr> <tr> <td>4年生(収穫3年目)</td> <td>60～80日間</td> <td></td> </tr> <tr> <td>5年生(収穫4年目)</td> <td></td> <td>50～70日間</td> </tr> </tbody> </table> <p style="text-align: center;">* 株の状態等により加減します</p> <p>なお、夏秋どり栽培では2～3週間程度早めの打ち切りとします。</p>	株の年生	1年生養成苗	セル成型苗	2年生(収穫1年目)	15～20日間	0～5日間	3年生(収穫2年目)	30～40日間	20～30日間	4年生(収穫3年目)	60～80日間		5年生(収穫4年目)		50～70日間
株の年生	1年生養成苗	セル成型苗															
2年生(収穫1年目)	15～20日間	0～5日間															
3年生(収穫2年目)	30～40日間	20～30日間															
4年生(収穫3年目)	60～80日間																
5年生(収穫4年目)		50～70日間															
<p>【きゅうりのかん水と施肥管理】</p> <p>きゅうりは、乾燥や過湿、窒素過多や肥料切れなどによるストレスを大きく受ける作物であることから、かん水は温度の低い朝や夕方遅くに行い、一度に多量のかん水をして畦間に長時間滞水したりしないようにします。これは根が湿害を受け、立枯れ性病害が多発してしまうためです。</p> <p>また、追肥も早め早めに少量づつ行い、肥切れにならないように努めます。逆に窒素過多や過繁茂にならないようにも注意しましょう。これは、べと病、褐斑病などが発生しやすくなってしまいます。</p>		<p>立茎管理</p> <p>立茎は、鱗芽群の広がりに合わせて行い、一つの鱗芽群に1本づつとし畦全体から茎を立たせるつもりで畦1m当たり16～18本目安に直径10mm前後の茎を立てます。</p> <p>その後施肥(基肥)を行います。年間の施肥量の50%を収穫打ち切り後のこの時期に施用します。</p> <p>(年間窒素施肥量を25～30kgとすると15kg程度)</p> <p>そして、管理機で15～20cmの中耕と深さ10cm程度の堀上げ・土寄せを行い、畦の高さを20～25cmにします。土寄せの目的は、茎葉の倒伏防止、鱗芽の充実、養分蓄積の促進のほか、雑草の防除や土壌の膨軟化の効果がありますが、あまり深くしない(10cm程度)ことがポイントです。</p> <p>また、フラワーネットやテープを使い倒伏防止策をしっかりと行い、風通しをよくするため50cm以下の下枝は除去するなど過繁茂を避け、風と光が株もとまで届くようにし株の充実に努めましょう。</p>															



簡易雨よけによる病害軽減事例 (夏秋どりのほ場)



農業豆知識



「新しい品目・作型に挑戦！！」

山菜の栽培（遊休農地の活用・省力品目栽培のために：その2）

＜ギョウジャンニンニク＞

ギョウジャンニンニクは、その名のとおり昔修験行者がスタミナをつけるために利用していたことに由来するといわれ、利用法としては、生のまま醤油漬けとしたり、細かく刻んで薬味としたり、天ぷらや卵とじなど多彩です。また抗菌作用や血栓溶解採用などの薬理効果も認められています。

ギョウジャンニンニクは、草全体に強いニンニク臭を持つユリ科の多年草で湿った沢筋などに自生しています。他の林床植物に比べ芽吹きは比較的早く、県内では3月下旬から4月始めにかけてとなります。5月中旬～6月中旬にネギに似た白い花を咲かせ、7月下旬頃に種子ができたあと、地上部は徐々に枯れ、その後翌春まで休眠します。地下部には、鱗茎を形成し、年数を経ると鱗茎数が増えています。増殖は種子によるほか、主に鱗茎の株分けによっても行われます。

栽培の適地は、初夏の頃に温度があまり高くない冷涼な地域で土壌が肥沃で水はけ・保水性のあるところです。明るい林床のほか畑地でも栽培可能ですが畑地の場合、遮光ネットが必要になる場合もあります。

ギョウジャンニンニクは、数年すると鱗茎数が増加してきますが増えた鱗茎を丁寧に切り分け増殖させます。種子に比べ収穫まで期間を短縮することができるので一般的に行われている方法です。

地上部が枯れこむ9月以降の休眠期に鱗茎部を掘り出し、ハサミなどで切り分けます。このとき鱗茎一つに一つ以上の根が残るようにし、切り分けた鱗茎はまた植え付けます。植付け間隔は特に決まりはありませんが、条間25～30cm、株間10～15cm程度を目安とします。また、植え込むときは、鱗茎先端が地上から2cmくらい深い位置になるよう植え込み覆土をして完了です。

植え込み後の作業は特にありませんが、翌春以降は除草を行う必要があります。

ギョウジャンニンニクは、養分に対する反応が良いので収量を上げるには施肥(堆肥)が効果的で、施肥量は土壌条件にもよりますが10a当たり3～5t程度が効果的とされています。なお、一度に大量の堆肥を施用するのではなく土壌条件を勘案し何度かに分けて行うことが大切です。

オンシツコナジラムの効果的防除（農薬の使用事例）

会員の皆さんの中には、「オンシツコナジラム」で苦勞をしている方もいるかと思いますが、「現代農業」の6月号に効果的な防除法の事例が掲載されていたので、紹介しますので参考にしてみてください。記事では、「バイオタイプQによく効く」とありますが、これは簡単に言えば「農薬に対する抵抗性を持っているコナジラムの種類」のことで、県内ではまだ確認されていません。

（今後、県内にも侵入してくる可能性もありますので注意が必要です。）

・効果的防除の第1歩は、予防薬と特効薬を使い分けることが大切とのことです。予防は比較的安いモスピランなどで良く、問題は発生してしまった時にきちんと抑える特効薬が重要とのことで、それにはアルバリン顆粒水溶剤、サンマイトフロアブル、ベストガード水溶剤の三つが挙げられるとのことです。これを三日間隔のローテーションで一剤ずつ使えば、ほとんどの場合抑えられるそうです。散布する時期は、株を揺らしてコナジラムが一株に四頭位発生した時であり、ローテーションの順番はアルバリンとベストガードの間にサンマイトを挟むことが大切であること、三回目にはカスケードやカウンターなどのIGR系の薬剤を混用するとより効果が高まること、さらには展着剤のスカッシュを加えるとさらに効果的とのことです。（詳しくは現代農業6月号を参照してください。）

農薬代の節減に向けて

農薬も肥料同様に生産費の中で比較的経費率の高い資材です。少しでも経費を削減するために「使用倍率」と「価格」から単位当りの経費を比較してみませんか。

(例) A剤：500cc1本	1	500円(使用倍率:1,000倍)	・・・	100ℓ当りの農薬代：300円
B剤：500cc1本	8	500円(使用倍率:2,000倍)	・・・	同上：850円
C剤：500cc1本	9	300円(使用倍率:2,000～4,000倍)	・・・	同上：620円

以上のような事例を比較すると、A剤はもともと安価な農薬ですので、100ℓ当りの農薬代は安くなりますが、C剤の様に高い農薬でも使用倍率(ここでは3,000倍で計算)が大きいとB剤と比較すると、100ℓ当りの農薬代は、C剤の方が安く済む計算になります。（効果は同様と想定した場合）

あさつゆ連絡先 電話:FAX 41-1062

技術事項作成協力：上小農業改良普及センター
地域生活係 中澤普及員（25-7156）